

■ 実体験を通して学ぶことの大切さ

私たち一行は女川で地元の方々の「郷土を守る！」という熱い思いを胸に、しばし旅の疲れを癒すべく栗駒山麓にある“さくらの湯”に向かいました。今回は1泊3日の強行日程に加え2日目は天候が悪く、特に夜にかけて雨が激しく冷え込んできたので、ここで温泉に入れるのは非常にありがたかったです。

さて、さくらの湯を後に私たちは予定より1時間遅れで、21時にくりこま高原自然学校に到着しました。この自然学校は2008年に発生した「岩手・宮城内陸地震」で大きな被害を受けており、それ以来営業を中止していたようですが、私たちが宿泊させて頂くということで、今回わざわざ施設をあけていただきました。

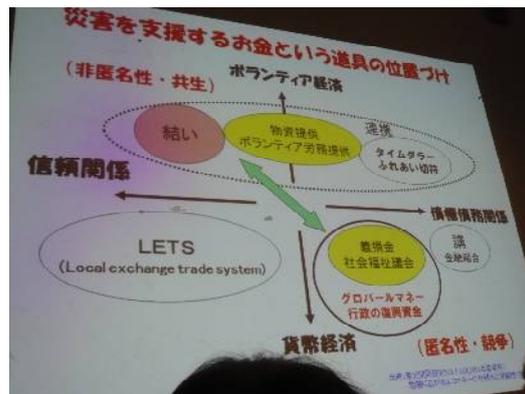


私たち一行は薪ストーブで温められた大広間に案内され、くりこま高原自然学校の運営者で日本バイオマスネットワークの運営委員長でもある佐々木さんから、自然学校の活動や今回の被災地支援の状況など実体験に基づく様々なお話を伺いました。自然学校では国からのバックアップを受けての若者自立塾や山村留学などを通して次代を担う若者の育成を行っています。また、ペレットストーブの普及にも力を入れており、今回も

避難所へ何台ものペレットストーブを寄贈していただけるとのことでした。

佐々木さんのお話の中で“ボランティア経済”という言葉が特に印象に残っており、これは日本に昔からある“結い”や“助け合い”などの地域社会とのつながりからなる、資本主義経済とは異なる活動の形態です。

概念のみの学習である“形式知”ではなく、実体験を通して学ぶ“暗黙知”の重要性についてもっと考えよう、そして教育に取り入れようという話がとても印象的でした。



また、快適なゾーン(Cゾーン)にいつまでもいることは自身の成長のためにはマイナスであるという信条から、今回も震災支援に自分自身が率先して積極的に関わっているとのことでした。その一環として、今回の震災による住宅の問題で、国の推進する仮設住宅以外の選択肢として「持続可能な復興共生住宅プラン」というものを提唱されています。これは地元の木材を使



い、地元の企業によって共同住宅を建て、そこを震災孤児などへ生活の場として供給していこうという計画であり、すでに動き始めているプロジェクトで今後の展開が楽しみです。その夜は佐々木代表を囲み、深夜遅くまで様々なことについて語り合いました。まず、今のゆとり教育や草食系の若者について話が及び、豊かになりすぎた今の日本の状況や、暗黙知は体験を通してしか学べないといったことについて熱く語っ

ていただきました。また、21歳くらいまでに様々な体験を通して得られる暗黙知の部分がない人間は、「いくら教育しても概念化ができず、それゆえに形式化ができない、言葉が通じない」という問題も起こっているそうです。“会社の共通の価値観であるES(従業員満足)を軸とした“ESクレド”活動があって始めてCS(顧客満足)へとつながる“という考えは、まさに我が意を得たりと思いました。今回も多くの気づきや発見を得るとともに、これからの日本のために何が必要なのかということについて、各々が自身で感じ取った有意義な一日でした。

■ こんな巨大な船が、なぜこんな場所へ？

翌朝はまだ外が薄暗く寒い5時に佐々木代表の見送りの中、自然学校を出発しました。昨夜とは違ってかわり、本日はとても良い天気にも恵まれました。朝 8 時ころ気仙沼に到着し、地元を中心に障がい児の支援活動を行っており、社会イノベータ公志園で東北代表にもなった“特定非営利活動

法人 ネットワークオレンジ”の方々からお話をお聴きました。

代表の小野寺理事は障がいを持った 2 児の母でもあり、また今回の震災で施設自体も被災するという大変な中、飾らない言葉で自身の体験も踏まえ地元の被災状況について語っていただきました。私たちが特に感心したことは、いざという時のために毎月 1 回の避難訓練を実施し、普段から震災時におけるマニュアルを作成していたため、今回の震災でも印鑑などの最低限必要なものは持ち出すことができたという点でした。このことはともすれば“喉元過ぎれば熱さを忘れる”といったことになりがちな私たちにとって、非常に良い手本になると思います。現に世界各国が日本の防災訓練や意識の高さを見習って訓練を開始したとのニュースも先日耳にしました。



一方では、今回の震災で地元の地主の方々の一部では土地の下落などにより生活の基盤が崩れ、心が荒んでしまった人たちも多くいることを聴きました。普段おとなしい人が発狂したりする様を見て心を痛めたとの話に、改めて震災が与えた様々な影響やその後のメンタルケアについての難しい対応なども今後は考えていかなければならないと感じました。

また、今回の震災の被害によって、ネットワークオレンジではネット環境がやられてしまい、ホームページの更新や情報発信が自力ではできなくなってしまったそうです。そんな中でもメンバーのみんなで協力し、電波塔の近くから携帯電話などを使って全国の支援者に SOS を発信して乾電池や飲料などの物資を送ってもらったそうです。



続いて、同じくネットワークオレンジの藤村さんによる案内で、ニュースでも生々しい火災と津波の映像で放映された気仙沼の中心部を訪れました。震災当日は藤村さんもちょうどバスを運転して生徒の送迎中だったようで、今でも現場を見ると涙がこみ上げてきそうになるので、本心ではあまり近づきたくはないそうです。

現場に着くと、そこは見渡す限り廃墟と化しており、道路だけが綺麗になっている他は、殆ど手付かずのような状態でした。そして、そこでひときわ目を引いたのが宇宙戦艦ヤマトを思わせる巨大な船が海岸から遠く離れた陸地(本来であれば住宅地の真ん中)にまで打ち上げられている様子でした。こんな巨大な船がなぜこんな場所まで?と思わず唖ってしまうくらい、非常に凄まじい津波の威力を感じずにはいられませんでした。藤村さんの話によると、撤去しようにも所有者負担で数億円はかかるため、当面は放置せざるを得

ないのだろうとのことでした。最後に小野寺代表が、市民と行政がパートナーとなって“震災を超えての新しい街づくり”をやっていくと力強く言われていた言葉に、私たちが反対に勇気をもらい次の訪問地へ向いました。

さて、衝撃的な数々の状況を目の当たりにしながら、最後の目的地である南三陸町へ向けて、バスは動き出します。今回の車窓からみる光景として、この気仙沼から南三陸への区間が一番被害が大きかったように思います。道すがら橋が津波で崩壊していたり、なんともやりきれない様子で瓦礫を撤去している大人や子供の姿を道すがら目にするたびにいたたまれない気持ちになりました。



■ 大津波の爪あとから復興へ向けて

いよいよ今回の復興支援バスミッションの最後の訪問地である南三陸町へやってきました。南三陸町の様子はニュースでも見ていましたが、現場のあちらこちらでは自衛隊による撤去作業が進められていました。



私たちがまず向かった先は、現在校庭は自衛隊のキャンプとして、校舎は避難所として使われている志津川中学校でした。そこで南三陸町を拠点に救援活動を行っているユナイテッド・アースの瀬川さんから現場の状況を簡単に説明していただきました。ご



存知のとおり南三陸町は今回の東日本大震災で甚大な被害を受けた地域ですが、50年前のチリ地震でも津波の被害を受けており、住民たちの間では日頃から避難訓練を行っており防災意識は高かったとのことでした。それなのになぜこんなに被害が大きかったのでしょうか？その理由の一つは予想を遙かに上回る津波がきたこと、そしてもう一つは前出した佐々木さんのCゾーンの話にもありましたが、チリ地震の津波の時の経験から「まさかここまで」と思っていた方が多かったようです。実際に海岸近くよ

りも内陸部で、より被害者が多かったことをお聴きしてあらためて今回の津波の大きさを痛感しました。

この南三陸では湾が巾着型になっており、他の地域に比べ高い津波に襲われたため、津波が引くときに一緒に建材や車、泥などを一切合切持って行ってしまったそうです。そのため、ヘドロや瓦礫の除去等の作業負担が他の地域に比べかなり少ないようで、復旧作業も進んでいるとのことでした。確かに、志津川中学校がある高台より南三陸町を眺めてみましたが、今まで見てきた他のどの地域よりも瓦礫が少なく、復旧が進んでいるように見えました。



瀬川さんによると元々南三陸町は宮城県下でも観光で成功していた町であり、行政の決定権も早く既に様々な復興プランも計画されているそうです。4月から毎月最終日曜日に「復興市」も開かれるのが決まっており、そこでは地元の特産にちなんだ地域通貨“タコ通貨”も使われるそうです。5月からは関東を始め全国から観光客を呼びたいと非常に熱く語られていたのが印象的でした。

それではなぜ、このように南三陸町が他の地域より復興の動きが早いのでしょうか。私たちの疑問に対して瀬川さんは、「それは他の地域に比べ、町全体で観光業や商店街を盛り上げたり、地域子どもたちを主役にしたイベントを数多く開催したりしているせいです」と、普段から町の人々の間でつながりを大切にしてきたからだと言っています。このことは会社でも同じであり、危機に陥ったときにダメな会社と元氣な会社との違いは、その会社が日頃から社員同士のつながりの大切さや、コミュニティのあり方をどのように考えているかにだと思っただ次第です。



志津川中学校内に入り、瀬川さんが尊敬の意を込めて“現地のボス”と呼ぶ地元商店街の会長兼町長の後援会長でもある山内さんとユナイテッド・アースの郷右近さんも混じえ最近の活動状況をお聴きしました。まず皆さんが口を揃えて言われていたことは「今回の震災は数年或いは10年以上の長期的なスパンで復興支援をしていかなければならない」ということでした。山内さんは地元で数件の魚屋を経営していましたが、今回の震災で全部

のお店が営業不能状態になってしまっており、現在復興ファンドを立ち上げるべく日々奔走している多忙な合間に駆けつけてくれました。震災を受ける前は、隣町である登米市と協力して、南三陸の魚介類と登米の野菜、肉類を共同ブランドとして仙台市内や全国の見本市に卸していたそうです。

また、南三陸の商店街は以前より全国の商店街と連携を深めていたおかげもあり、震災時には山形県酒田市の商店街を拠点に全国各地から支援物資が届けられたそうです。復興市でも小浜市の箸を始め、全国各地から寄せられた物資をもとに復興へ向けて頑張っていこうと力強く言われていたのが印象的でした。あらためて地域同士のつながりの大切さを実感しました。

山内さんによると水産業は他の一次産業に比べて回復力が早いそうで、津波によって湾内が攪乱された今は、非常に生産力が高まっているそうです。今まで石巻や気仙沼などで漁師の方から、漁業が壊滅状態であることを聞かされてきたので、これには非常に驚きましたが、最後にこの言葉を聴いて大きな希望が持てました。

最後に、瀬川さんと郷右近さんの案内で南三陸町のシンボルとも言える防災対策庁舎を見に行きました。近くに寄ってみると3階立ての鉄筋コンクリート造りの庁舎が鉄骨を残すのみの見るも無残な姿で建っています。その場で元庁舎を見上げながら、この屋上でアンテナにしがみつき、かろうじて九死に一生を得た町長のエピソードを聴きましたが、あの高い場所まで津波が押し寄せてきたとはにわかに信じられません。



大津波が来る中、冷静に避難を呼びかけ続け殉職された女性職員の話や、身内の行方が不明な状況で必死に避難所を駆けまわる職員の話など、この南三陸においても様々な方の話を聴きました。

今回のバスマッションでは現地に行って始めてわかる、地元の人々の“それでも前に進んでいこうという気迫”や“明日への希望”といった熱い想いの数々をこの目に焼き付けておくことができました。そして今まさに私たち日本人は、これからの長い復興への第一歩を踏み始めたとの想いを実感し東京へ帰ってきました。

■ おわりに ～これからのボランタリー経済において私たちができること

私たちは、被災地域の方々に対し、私たちのご縁ある皆さまと共に、これからの経済の新しい形である「ボランタリーな経済行為」を推進して行きたいと考えています。

具体的には、有限会社人事・労務と弊社が母体である日本ES開発協会との協働で、添付のご案内のとおり「東北農援団プロジェクト」への参加を呼びかけ、東北の農家、漁師、林業の皆さんの雇用創出、日本のふるさとの元気を支援していきます。

「農」は、日本の働くの原点。農業が廃れることは、日本そのものの誇りある仕事観を失うことだと私は考えます。

ぜひ、「日本の未来の働くを創造する」ためにもご協力ください。

また、今回訪問した被災地域からは、下記の支援要請をいただいています。

- ユニック車2台
- 避難所の方々のメンタル面のケアしてくれる方
- 船(小さな船外機でも可)
- 自動車(中古車も含む)
- 中学生が部活等で着られる運動用ユニフォーム

甚大な被害を受けた地域の一つである南三陸町では、5月29日に「復興市」が行なわれます。

Webやさまざまなメディア等でその宣伝を行ってくださる方を必要としています。

また、木工の商品を流通してくださる方はいらっしゃいませんか？

宮城の工芸品をぜひ全国の皆さんに届けてください。

上記のような支援は、(社)登米市観光物産協会、南三陸商工会、JFみやぎ志津川支所、JF南三陸志津川支所、南三陸町森林組合という5つの団体から要請をいただいたものです。

各団体への連絡は、日本ES開発協会、および弊社が副代表幹事を務める株式会社オルタナ主催の「グリーン経営者フォーラム」を通して、行わせていただきます。

皆さまとのご縁から生まれる力を、ぜひ被災地域の復興のために、日本社会の未来の”働く”のためにつなげていきたいと考えています。

今後ともよろしくご厚意申し上げます。

以上の情報についてのご質問などは、(有)人事・労務までお問い合わせください。

有限会社人事・労務

(本社) (新潟支社) 〒940-0064
〒111-0036 新潟県長岡市殿町 2-3-9-3F(崇徳館内)
東京都台東区松が谷 3-1-12 TEL0258-37-5566 FAX0258-37-5595
松が谷センタービル 5F
TEL03-5827-8217 (横浜オフィス) 〒212-0058
FAX03-5827-8216 神奈川県川崎市幸区鹿島田 974-13
(e-mail) info@jinji-roumu.com クォーターキューブ新川崎 202
(URL) <http://www.jinji-roumu.com> TEL044-522-6580 FAX044-522-6820
日本ES開発協会 (URL) <http://www.jinji-es.com/>